

私たちは愛知万博の救急医療体制を継承します。

# グローバル

第4号

2014/2

編集/発行

特定非営利活動法人

愛知万博記念 災害・救急医療研究会

題字：矢野きよ実 書

## CONTENTS

- 特別寄稿(小出宣昭氏)..... 1
- 平成24年度事業報告 ..... 2
- シカゴマラソン視察記 ..... 3
- 平成25年度事業計画 ..... 5
- 会員活動紹介 ..... 6
- 役員紹介 ..... 7



## 特別寄稿

中日新聞社代表取締役社長  
小出 宣昭氏



数車無車。車を数えて車なし、と読む。中国の古典『老子』に出てくる言葉だが、これだけでは何のことやら分からない。

江戸中期の儒学者、荻生徂徠による大意はこうである。車をじっくり見ていくと、輪っばがあり、車軸があり、引き手があり、荷台がある。現代の自動車ならハンドル、ブレーキ、バックミラー、エアコン、ボディーと、さまざまな部品に分解される。だが、ふと気付くと「車」というものはなくなってしまう。

全体としての「車」は、目に見えず、手で触れることのできない抽象概念なのだ。命とか愛とか、情熱とか魂とか、そういったものに似ている。

人間もそうである。手や足、目、鼻、口、耳、胃、肺、腸とさまざまな部品に分けていくと、結局は「人間」がなくなってしまう。

高度化する現代医療の現場では、多くの医師たちは患者の顔を見ず、ひたすらパソコンの画面を見つめながら、部品のデータで診断しているようだ。精密に「車を数えて」いるのだろう。

だが、ふと気付くと肝心の「人間」は消えている。患者の顔も見ずに部品のデータだけで、どうやって目に見えない「人間」という抽象的な命を助けることができるのか。

救急医療の現場は現代医療が陥りがちな、車(人間)を忘れ、「車を数える」ことでは解決できない難問の連続である。破壊された部品のどれを最優先で治療すれば、目に見えない「命(人間)」を救うことができるか。時間との闘い、優先順位の的確な決定を試行錯誤する戦場のようなものだと思う。

この世の中で、大切なものほど目に見えないものだ。春だって、秋だって目に見えない。

優れた画家は花を描いて花を描かず。一輪の花の中に目に見えない「春」をいかに招き入れるか、それが芸術だ。

救急医療の現場で熱や呼吸、血圧と闘い、目に見えない「命」を紡ぎ出す医師たちは、さながら多くの人に感動を与える芸術家のようなものである。この道に志と情熱を抱く若者が次々と出てくれば、どんなに素晴らしい日本になるだろう。

# 事業報告

## 災害・救急医療に関する調査及び研究事業(定款第5条1-①)

### ■ 第1回マラソン大会医療ミーティング

実施日：平成25年3月9日(土)

場 所：中日パレス

## 災害・救急医療に関する教育及び普及事業(定款第5条1-②)

### ■ AED普及事業「みんなの祭り」

実施日：平成24年4月28日(土)

場 所：松坂屋南館オルガン広場

## 災害・救急医療体制の整備に関する支援事業(定款第5条1-③)

### ■ 第14回につぼんど真ん中祭り

実施日：平成24年8月24日(金)～26日(日)

場 所：久屋大通公園場所及び名古屋駅前場所一帯

### ■ 愛フェス2012

実施日：平成24年9月29日(土) ※30日(日)は台風のため中止

場 所：愛・地球博記念公園

### ■ 愛知万博メモリアル愛知駅伝(第7回愛知県市町村対抗駅伝競走大会)

実施日：平成24年12月1日(土)

場 所：愛・地球博記念公園

### ■ マラソンフェスティバル ナゴヤ・愛知2013

実施日：平成25年3月9日(土)及び3月10日(日)

場 所：ナゴヤドーム及びナゴヤドームをスタートとする周回コース

## 出版に関する事業(定款第5条1)④

### ■ もしものとき スマフォ版開発

# シカゴマラソン視察記

中川 隆

(マラソンフェスティバル ナゴヤ・愛知2013WG座長)

名古屋ウィメンズマラソンの救急・救護体制のさらなる充実を目指すには、世界メジャーマラソンの実際をこの眼で見るべきと考えていたところ、幸運にもシカゴ・マラソン視察の機会を得た。

視察団は当NPOから野口宏理事長と筆者(中川)、マラソンフェスティバル ナゴヤ・愛知 実行委員会事務局から北野耕示氏と桑山幸久氏、さらに3名の名古屋ウィメンズマラソン関係者の計7名であった。

2013年10月10日朝にシカゴ到着。大阪からすでに現地入りのシカゴ・マラソン調整担当者の出迎えを受け、すぐに実際のコースを車で移動しながら下見した。街は至るところにマラソン開催直前のお祭りムードを感じさせるポスターやバナーが掲示されていた。

シカゴの街を主に南北に巡るコースはミシガン湖岸の公園をスタート地点とし、ダウンタウン、高層ビル群を駆け抜け、住宅街、2つの大リーグ野球場、中華街など実にさまざまなシカゴの顔を楽しめるコースであった。

翌日は医療体制の概要把握のため医療救護所などの視察を行った。事前にマラソン医療体制の医学論文をざっと調べるとシカゴからの報告が多いことが分かった。シカゴ・マラソンの医療チームリーダーはGeorge Chiampas医師と知ったが、アポイントなしでは到底会えないものと思っていた。

早速ゴール地点の医療テント(ストリートの名前からBalboテントと呼ばれている)へ行った。およそテニスコート4面ほどの十分過ぎる広さであった。数名の関係者が作業中であったがノンビリした雰囲気であった。そこへふらりと近づいてきた人物が何とChiampas医師(写真1)であり、挨拶もそこそこに、こちらの質問にも丁寧に答えてくれて幸先よい視察となった。



(写真1) Chiampas医師(中央)

この医療テントから数十メートル離れた本部テントへ行くと、そこには昨年からの試験運用中の患者トラッキングシステムのパソコン、ディスプレイが並んでいた。これは医療テントやエイドステーション(後述)のベッド運用状況が刻々とオンラインで伝達されるもので、一定の在室時間を超えると迅速な対応を促すアラートとしてベッドの色彩が変化するものである。これは災害医療の災害救護所や広域医療搬送のSCU(Staging Care Unit)に応用できるアイデアであり非常に興味深いものであった。

このあと参加ランナーの受付登録会場であるコンベンションセンターへ行った。スポーツ関連グッズの展示ブースが数多くあり、まるで賑やかなお祭りの雰囲気であった。コマーシャリズムそのものという意見もあろうが、とにかく楽しもうという精神を垣間みた思いであった。

10月13日、いよいよマラソン当日である。6時過ぎにホテルを出発。肌寒い朝であったがタクシーより地下鉄の方が確実と考えたが、地下鉄車内はランナーや家族、関係者でかなりの混雑であった。スタート地点に向かうころ周辺は相当な混雑で、医療テント手前ではしっかりとセキュリティーチェックされた。



(写真2) 医療テント内の様子

テント内は医療スタッフでごった返していたが、職種別のビブスによりはつきりと判別できた。7時20分の車イスレースのスタートに続き7時30分のスタートであった。われわれはスタートの瞬間を見届けることはできなかったが、テント内の慌ただしい雰囲気(写真2)を感じることができた。

テント内はICU(計21ベッド)とUC(Urgent Care、椅子のみ)さらにGC(General Care)に区分されている。さらに血液検査にも対応しており、さながら救急外来の様相であった。特に目を引いたのは、熱中症対応としてバスタブが数個用意されていた。エイドステーション(救護所)は全コース20カ所配備されており、医師が必ず常駐しているという。また全てのエイドステーションに4~6名のアマチュア無線愛好家(医療従事者ではない)(写真3)が配置されている。これは情報伝達の最後の手段として確保されていると聞いた。これも災害時に応用できるアイデアである。

医療スタッフは総勢約1400名(医師・レジデント約200名、足専門医約10名(Podiatry 後述)、看護師約240名、トレーナー約20名、救急隊員約70名、学生約560名、理学療法士約30名、ゴール予備スタッフ約70名、ゴール後監視員約40名、その他)で、基本的にはボランティア参加であり、医師には医療過誤に備え保険でカバーされている。足専門医は米国の通常の医師養成課程とは別コースで養成され、Podiatryと呼ばれる足専門の医師である。本邦では全く馴染みがないが、マラソン競技でのニーズは当然高く、別個のテントを構えていた。

エリートランナーは2時間少々で早々にゴールインす

るなか、ランナー総数はおよそ37,000人(公式発表では45,000人であるが不参加者が相当数あるため実数は少ないという)が沿道の応援を受けて走る光景は圧巻であった。

医療体制のうち最も重点を置いているのはゴール前後の各々数百メートルでの傷病者の発生であり、6台のAEDを集中配備している。またゴール後の疲労困憊のランナーの異変を見逃さないように監視員は脚立程度の高さのボックスに陣取り(表紙写真)注意深く見守っていた。

シカゴ・マラソンにおける心肺停止症例は、2007年以降に死亡例が2件あったが、2012年には救命例を1件経験したという。AEDは医療テント、ゴール付近はもちろんのこと各エイドステーションに配備されており、ゴルフカート隊、自転車隊なども運用されていた。またシカゴ消防局の救急車は用いず、米国独自のサービスである民間救急車を活用しているのが印象的であった。これはシカゴ消防局は日常の救急対応に忙しく、とてもマラソンには手が回らないという現実があるようだ。

要約すると、シカゴマラソンの医療体制の基本コンセプトは 1) 傷病者の早期安定化、2) ALSの早期実践(心肺停止に限らず)、3) 救急医・スポーツ医をはじめとする他職種のチームの取り組みと関係者は言う。

筆者が強く印象に残ったことは、1) 患者トラッキングシステムの運用、2) アマチュア無線の活用、3) ゴール地点の重点ケア、4) Podiatryの活躍である。

今回の視察は今後のマラソンフェスティバル ナゴヤ・愛知の医療体制に大きなヒントを与えてくれた。この貴重な経験を是非とも活かしたいと思いながらシカゴをあとにした。



(写真3) エイドステーションのアマチュア無線チーム

# 事業計画

## 災害・救急医療に関する調査及び研究事業(定款第5条1-①)

### ■ シアトル市救急医療体制視察研修

平成26年2月(予定) 5名程度

### ■ 第2回マラソン大会医療ミーティング

平成26年3月8日(土) 中日パレス

## 災害・救急医療に関する教育及び普及事業(定款第5条1-②)

### ■ AED普及事業「みんなの祭り」

平成25年4月27日(土) 松坂屋南館オルガン広場

### ■ 災害医療セミナー

平成25年9月～26年1月の間の1日 名古屋市内

### ■ マラソン大会医療体制視察事業

シカゴ、東京、大阪、神戸、札幌、京都等 25名程度

## 災害・救急医療体制の整備に関する支援事業(定款第5条1-③)

### ■ 介助犬を応援しよう!チャリティマラソン

平成25年4月21日(日) 庄内緑地公園

### ■ 全日本うまいもの祭り

平成25年4月27日(土)～29日(月)、5月3日(金)～6日(月) 愛・地球博記念公園

### ■ 第15回につぼんど真ん中祭り

平成25年8月23日(金)～25日(日) 久屋大通公園場所及び名古屋駅前場所一帯

### ■ 愛フェス2013

平成25年9月28日(土)及び29日(日) 愛・地球博記念公園

### ■ 愛知万博メモリアル愛知駅伝(第8回愛知県市町村対抗駅伝競走大会)

平成25年12月7日(土) 愛・地球博記念公園

### ■ マラソンフェスティバル ナゴヤ・愛知2014

平成26年3月8日(土)及び3月9日(日)

## 出版に関する事業(定款第5条1)④

### ■ もしものとき スマフォ版開発及び公表

### ■ 機関紙発行 2月

# 会員活動紹介

～あの人の素顔、最高の笑顔～

私のSECDEMとの出会いは、2005年に開催された愛知万博で一般市民の方にAEDの使用方法を説明させていただいた時からです。その頃はまだ救命救急センターしか知らず、周囲の人と共通の認識で「救命の連鎖」をつないでいました。

それから間もなく一般病棟へ配置替えとなったある日の出来事です。10歳の女儿が急変した時に医師から出された指示は、胸骨圧迫と人工呼吸を5:2で行う心肺蘇生でした。緊迫と共に騒然とした場で、名前を覚えたばかりの口調の荒い医師に向かって何も言う事ができませんでした。心拍再開はしたものの女儿の意識は回復せず、その時に自分のとった行動が悔やまれて仕方ありません。

日常の職場とは違う場所や人との活動である



鈴木 朝子  
(藤田保健衛生大学病院)

SECDEMは、私にとってリフレッシュの場であり、顔が見える関係づくりや情報共有の大切な場であると同時に、とても良い訓練の場となっています。「救命の連鎖」を絶やす事がないよう、今後もSECDEMの活動を通して皆様と関らせていただきたいと思います。日頃は様々な立ち場で其々の役割を担っている方達が、「SECDEM」という共通の繋がりでひとつになれる事をとても嬉しく感じています♪



山本 康資  
(一宮市消防本部)

私とSECDEMとの関わり合いが始まったのは2004年の秋頃でした。まだ、SECDEMは立ち上がっていませんでしたが翌年の「愛・地球博」にむけての医療体制の確立に向けての会議に出席してからです。まだ万博場所にはトラックなどの建設作業車などが急ピッチで開幕にむけて忙しく動いている頃でした。野口先生、井上先生、小澤さんたちと博覧協会側との激しい？バトルに圧倒されっぱなしの会議だったことしか覚えていません。細かい内容まで把握出来るところまで私は出来ませんでしたが、既存案での開幕ではいけないという強い意志で望んでいた会議です。なんとしても場所内で命を落とすような事があってはならない。笑顔で入場し笑顔で帰って頂く…それに向けて足りない物、至らない物、手の届いて無いものへのぶつかり合い。「なにもしないで…」と中途半端な考えでは通らない、並々な

らぬ熱意をある意味執念として捉えることが出来ました。激しい会議を何度も開催し、いよいよ開幕。「よし!!これでいい!!」と安心した気持ちはなぜか持てませんでしたが、開幕前の大訓練で今までの苦労と不安が一気に払拭される事案が発生しました。医療班の訓練が一通り終了したころ「CPA事案発生!!直ちに現場へ向かって下さい。」と緊急無線が入ったのです。「あれ?これ訓練?本番?」顔を見合わせた花木先生と竹内先生とでカートに乗り込み現場に急行!!建設作業員がCPAに陥っておりBLSスタートとともに除細動1回実施、チューブでの気道確保、薬剤投与と、それは眼にもとまらぬ速さでの処置でした。万博救急隊が到着する頃には自発呼吸が戻り病院に向かうことができました。時間が経つほどに不安が自信に代わり開幕から六ヶ月間の活動も無事参加することが出来ました。あの万博場所での経験は今も忘れることが出来ません。閉幕の終了無線で涙が止まりませんでした。自分は隠していましたが、周りのみんなも泣いていましたので、その後は大泣きです。ボランティアとして集まったSECDEMの会員達と、とても充実した六ヶ月間でした。その活動が今も継続されていることに誇りを持ち、あの感動を忘れずに今後も活動したいと思います。

## 役員紹介(平成24年6月29日～)

理事長	野口 宏	(愛知医科大学名誉教授)
副理事長	水野 孝一	(公益財団法人につぼんど真ん中祭り文化財団専務理事)
理事	中村 利雄	(日本商工会議所専務理事、元2005年日本国際博覧会協会事務総長)
理事	富田 英之	(東朋テクノロジー株式会社代表取締役)
理事	小川 誠	(元名古屋市消防長)
理事	横井 隆	(公益社団法人愛知県医師副会長)
理事	矢野きよ実	(タレント、書道家)
理事	ダニー リスバーク	(株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン代表取締役)
理事	中川 隆	(愛知医科大学教授)
理事	北川 喜己	(名古屋掖済会病院副院長)
監事	花井 増實	(万葉総合法律事務所)
総務部長	津田 喬子	(公益社団法人日本女医会会長)
事務局長	小澤 和弘	(愛知医科大学病院高度救命救急センター)

## 編集後記

会員の皆様、お変わりありませんか。  
 昨年は猛暑ばかりではなく、水禍、災  
 禍、輪禍によって尊い命が失われ、改めて  
 「いのち」の大切さを意識しました。「世  
 の中で大切なものほど目に見えない…。」、  
 特別寄稿を頂きました中日新聞社代表  
 取締役社長の小出宣昭氏のお言葉は、まさ  
 に今の世への警鐘と思います。

マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知  
 2013では、テロを想定した医療体制  
 を組んでいましたが、実際にポストンマラ  
 ソン大会でのテロ発生時には、いよいよ現  
 実となってきたかと戦慄を覚えた一方で、  
 SECDemの医療体制の先見性を確信さ  
 れた方も多かったことと思います。国際  
 級マラソン大会の一つとして、ポストン、シ  
 カゴマラソン大会等と同様に認定された  
 マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知がよ  
 り安全に開催できるよう、主催者の中日  
 新聞社のご英断でシカゴマラソン大会視  
 察が実現しました。素晴らしい大会の様  
 子が視察記から実感できました。本号に  
 は一般会員からの素敵な人と人とのつな  
 がりエッセイも掲載されています。グロー  
 バルアップでは「目に見えない大切なも  
 の」を守るSECDemの活動をこれからも  
 皆様にお届けします。SECDemに若人  
 よ、来れ!!そして、皆様からの「寄稿を  
 お待ちしております。」

(文責 津田喬子)

## 《研究会の概歴》

- 2006年7月 設立(愛知県知事認証)
- 2008年9月 平成20年度 救急功労者総務大臣表彰受賞
- 2011年3月 政策提言集「救急医療創国」発行  
(公益信託 愛・地球博開催地域社会貢献活動基金助成事業)